

東京家政学院大学 図書館報

平成17年3月5日 第51号

発行者 東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電話 042(782)9815
印刷所 (株) 栄文舎印刷所

これからの図書館を考える

総合情報センターへの私案

附属図書館長 天野 恒 男



経済・社会環境の変化やITの発展、加えて学問分野の横断型学際化が進むと、その環境に適応すべく今後の図書館はいつそう改革を迫られると思う。一つの構想として、図書館を中心とした「総合情報センター」を目指す案が浮かぶ。いまや図書館は単なる文献・資料の収蔵庫としてではなく、図書館という壁を取り払った「デジタルライブラリー」が目標となる。それは、外部からその壁を自由にすり抜けて諸データにアクセスでき、かつ内部からの確な検索・発信ができるシステムを有した情報センターとして機能する図書館である。「情報」に関しては、ソフトもハードも含めてこれを扱う大学全体の中核的な存在となること、図書館と呼ぶよりこの情報時代に即した情報センターとしてのあり方と考えるからである。そのためには、「情報」に関しては一元的に管理するという基本理念のもとに、全学的情報システムを構築することを具体的に、積極的に推進する必要がある。

情報を資源としてとらえるならば、その中は、身は文献、雑誌、資料、論集、DVD、VTR、音楽CD、テープ、マイクロフィルムなど様々なものがある。これらは、本学大学院、家政・人文学部、短大などにおいて現在および将来にわたって必要とされるものとして教育・研究に適応・貢献できるようにしていなければならない。その運営に関しては効率や予算の面から、文献・資料を整える「枠」という条件を無視するわけにはいかない。その限界を視野に入れながら、将来必要とされると予想し、備えておく価値があると判断すれば、これを揃えておくことが許されてよい。「大江文庫」に見るように長期間にわたる資料の蓄積によって、貴重な価値を有するようになるからである。これまでも、そうした視点から整えられたものは少なくない筈である。その判断は難しいが、多角的・将来的に物事をとらえ、何が真に必要とされるかを総合的に判断できる高い識見が、情報センター関係者に広く求められるところである。

同時にそうした情報資源を充実させ、かつ有効・容易に活用できるシステムを築くことが欠かせない。これにはハード面におけるIT機器の整備・充実とあいまって外部ウェブサイトを、データベースへのアクセス権などの拡充を行い、「利用しやすい」システムを構築することが考えられる。新聞記事、雑誌、紀要そのほかのデータに関して容易にアクセスできること、さらには、レファレンスの質的向上を目指し、多面的かつ高度なレファレンス機能を充実することなどはその一例である。もちろん、システムを動かすハードウェアとしての図書館事務システムやパソコン、LANターミナル、映像機器、音響機器などが有効に機能する環境として整備されていることが不可欠と考える。

これらの情報資源、システム、ハードウェアなどは、全体を管理するトータルマネジメントシステムを組み立て、それによって全体が有機的に効率よく機能するように図ることが必要になる。現存する図書館、図書館分室、情報処理センター、メディアスタジアムなどは、これを物理的に統合化することは困難であるが、システムをトータルで構築することは十分可能なことである。これが完成すれば、内外の情報や機器類を一元的に管理する

第五十一号 目次

これからの図書館を考える
総合情報センターへの私案

天野 恒男
「白昼に神を視る」
小島 俊明

大江文庫紹介「KVA祭展示」
小林 昭夫

ZOOGLICSによるOPAC
利用者アンケートについて

「カラーコーディネート」
井澤 尚子

本学教員寄贈図書紹介
図書館への協力

「AVコーナー」の仕切り」
山口 智子

館員による資料推薦について
感性と感性的デザインプロセス

資料紹介
「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

「Nameネイチャー」
岩見 哲夫

本の周辺

長谷川潔『白昼に神を視る』(白水社)

小島 俊明

銅版画家・長谷川潔は、その弟子筋の駒井哲郎によって、広く知られるようになったのではない。

生まれ(一八九一年)は横浜だが、二十八歳のときフランスに渡ったとき、八十九歳で没するまで一度も日本に帰らなかつた。フランス人女性と結婚し、フランスを拠点に活躍したから、日本では一般的に知られなかつた。五歳上の洋画家の藤田嗣治に似たところがある。

後に東京芸術大学の教授になった駒井哲郎が、師事してきた

人として、長谷川潔に光が当てられるようになったように思われる。彼ははじめ黒田清輝や藤島武二に油絵を学んだが、版画に転じ、木口木版画や銅版画の制作に専念するようになった。

フランスに渡ってからは、デュファイ、マチス、ピカソ、シャガールなど錚々たる面々のいる、独立協会のメンバーとして活躍した。とりわけ注目されたのは、マニエール・ノワールという昔フランスで用いられていた銅版画の技法を復活させたことだった。繊細で美しい気品のある銅版画は、人々を

魅了し、注目された。色彩を排除した黒一色の世界は、深い精神性をうかがわせた。

『白昼に神を視る』という本は正しくは、長谷川潔の著書ではない。竹本忠雄、魚津章夫、長谷川仁(甥)の三氏によって編まれた遺稿集である。資料集の趣の強い初版に比べて、改訂版は人と作品を浮き彫りにしている。

冒頭の断章が印象ぶかい。パリ近郊に散歩に出たとき「不意に一本の樹木が、燦然たる光を放って語りかけてきた。」「よく見ると、その樹が人間の目鼻だちと同じように意味をもっていることに気づいた。波長を合わせることによって聞こえてくる万物の声というものがあるのだ。」

「自然は、構成のほんの片鱗をわれわれに把握せしめるにすぎない。じつは明々白々として真理のトータルを自然はさし示しているのだが。」

「すべての芸術家は、多かれ少なかれ、神秘を表わそうとするものだ。ただありきたりの手段によつてではなく、それを表わそうとする。現代の画家の中には、対象をぼんやりと眺め、それをデフォルメさせることにとどまる人が多

い。しかし私は、一木一草を出来るだけこまかく観察し、その感官を測り、その内部に没入する手段をもとめる。できるだけ厳しく描いて一木一草の「神」を表わしたいがゆえに。現代は、神性の観念よりはいつて絵に至る。私は、物より入つてその神に至る。」



「林檎樹【再生したる林檎樹】」

「一木一草をつかもうとするとかならず神に突きあたる。若いときには判らなかつたことが、私には歳とともにだんだん判つてきた。」

「若いとき自分がなぜ、ムンクやルドンに惹かれたか。その理由が、このころになつて私にはようやく判つてきた。要するに神秘の感情を彼らは表現しようとしたのだが、しかし神秘的光景を描くことによつてそれを表現しようとした。これにたいして私の態度はこうなのだ——私は白昼に神を視ると。」

目を惹く文章を任意に引用してきたが、芸術家の思索の深まりは、そのまま作品に滲み出てくるものようだ。潔はリアリズムの手法で鳥なら鳥を描く。しかしその鳥は不思議なことに、現実の鳥を超えているのだ。私は潔の甥の生物学者・長谷川仁氏を識るチャンスに恵まれ、第四、第五詩集にそれぞれ一葉ずつ挿し絵として拝借できた。その二葉がこれである。「再生したる林檎樹」は大地の恵みを得てよみがえり、その芽ばえの新緑に対して、葉のない高い枝々が、大地に感謝のおじぎをしているようだ。

(人文学部教授)

*小島俊明詩集

「アシジの雲雀」思潮社

「葉ずれの歌」詩学社



「半開の窓」

大江文庫紹介

「KVA祭展示」

近世日本の子育て

小林 昭夫



わたくしは平成15年4月に本学家政学部に着任し、母子保健学や育児学などを担当することになりました。医学部卒業後、40年の長きにわたりわが国最初の小児病院（現・国立成育医療センター）と大学病院で小児科学の診療と教育に携わってきました。この間、育児に関しては日常診療で多くの子ども達を観察し、また3人の子どもの父親としての経験から、わたしの育児観を形成してありました。ベビー雑誌や婦人雑誌の依頼により育児に関する記事もたくさん載せましたし、育児についての電話相談や講演もしてきました。わたし個人としては、ひとかどの育児の専門家と自負してきたのです。

版といった感じで適切でないと感じておりました。ようやくのこと、今村栄一先生の「現代育児学」（医歯薬出版）に遭遇し、読むほどに育児学の面白さが募り、ぜひとも学生に育児学の真髄を知ってもらい、つぎの世代の子育ての一助になればと意気込んでいたところで

す。昨年、KVA祭の折、中庭の賑やかなイベントを見た後、少し静

かな所とあって図書館を覗いてみました。図書館の展示は「大江文庫 近世日本の子育て」でした。育児学担当のわたくしとしては見逃せないなと思いつつ丁寧に見て回ったのですが、17世紀中頃から江戸時代末期にかけての出産から乳幼児期の保育にかんする資料が

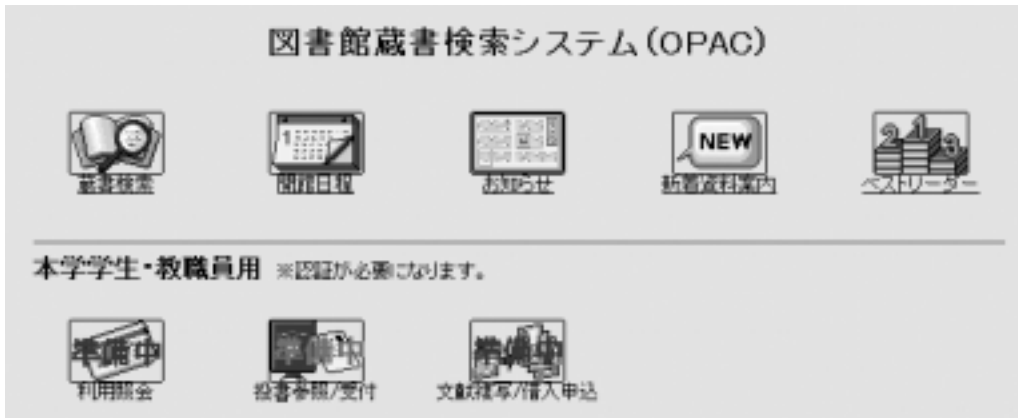
たくさん展示されているのです。わたくしは、よく図書館を利用しており、2階に大江文庫が陳列されているのは知っておりましたが、この種の資料があることはしりませんでした。「そだて草」、「やしない草」など絵入りの育児書でわかりやすく、驚くことには、現代のわたし達には読みにくい毛筆の文字を光塩会の有志の方々が後輩のために読みやすい肉筆のペン文字に書き換えてあるのです。大変な作業だったと思われま

す。育児というものは、人類が登場して以来存在し、民族や文明の違いによって異なるところもあるでしょうが、育児の本質、つまり子育ての目指しているところは変わらないと思います。本年より児童学科が開設されます。この機会に、ややもすれば変容しつつある現代の育児のありようを、これらの文献と比較検討してみたいかどうか。

（家政学部教授）



◆◆◆◆◆ OPACが新しくなりました ◆◆◆◆◆



OPACとはOnline Public Access Catalogの略でオンラインの蔵書目録のことです。本を探すときにカード目録ではなくOPACを使うことでほとんどの資料を探すことができます。

最初の図書館システム導入から2度目のシステム更新をして、1月から正式稼働しています。インターネットの社会への浸透により図書館システムもインターネットとの連携が深まっています。今回の新図書館システムでは、業務システムも利用者サービスもすべてインターネットのブラウザ上で稼働するようになっています。

新図書館システムは、インターネットにおける情報検索機能、情報発信機能、コミュニケーション機能を取り込んで、学生・教職員の学習・研究支援を強化しています。

特に蔵書検索システム(OPAC)では様々な点が強化されました。検索では全文検索が可能となり、書誌中のキーワードではなく、文字列からの検索を行います。文字列が一致すればヒットしますので、単語の途中などからも検索可能です。また、これまで検索対象でなかった注記等も検索対象になっています。

さらに、検索した資料の配架場所も表示されるので、より資料が探しやすくなりました。

検索以外では、メールで検索結果を受け取ったり、文献複写の依頼や貸出予約、自分が今借りている資料の確認などの利用照会が出来たり、図書館へのインターネット投書などが、図書館まで足を運ばなくも自宅や研究室などから出来るようになります。

まだ準備中の物もありますが用意在りしだい順次サービスを開始していきますのでご期待ください。

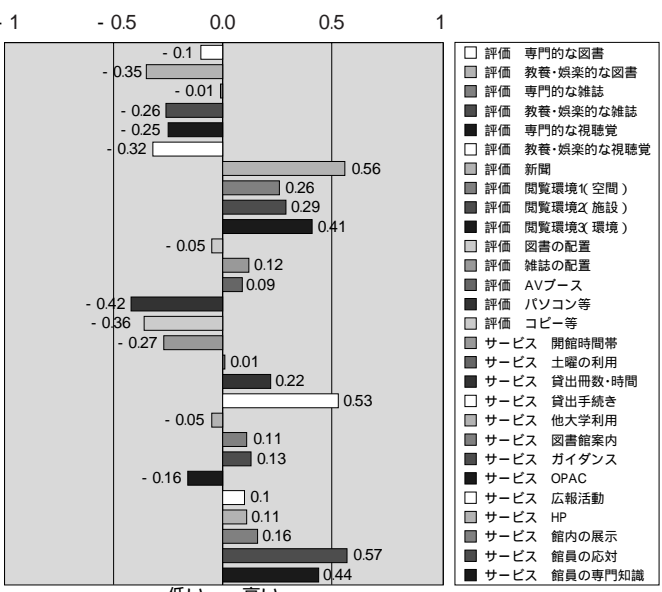
利用者アンケート調査の報告

平成16年4月に実施した利用者アンケート調査について報告します。

- ・調査対象者 大学の2・3・4年生及び大学院生
- ・有効回答数366 有効回答数 / 対象学生総数 = 22%

〔評価結果〕
04年度図書館利用者アンケート満足度調査

1. 評価の低かった項目
 教養・娯楽的な図書・雑誌・視聴覚資料の内容
 コピー・パソコン等の環境整備
 開館時間延長
2. 評価の高かった項目
 館員の応対
 新聞
 貸出手続き



アンケート調査結果を図書館本館1Fで展示しています。また調査結果の冊子を図書館本館1階カウンター、町田校舎学生課窓口にて配布しています。

評価方法について
 それぞれの回答数に「普通」=0 「満足」=+2 「やや満足」=+1 「やや不満」=-1 「不満」=-2
 を乗じた数値の合計を、総回答数で除した「加重平均値」による

「扉」を開けた本との出会い

井澤 尚子

色彩学の研究に携わっていた恩師今井弥生先生のもとで本学研究室に勤務し、『門前の小僧』となって以来、色彩に関わり模索の日々を過ごしている。

以前、「色彩調和」に関する資料を探し、途方にくれていたところ、知人に一冊の本を薦められた。『色彩調和の成立事情』（財団法人日本色彩研究所編、福田邦夫著、青娥書房）がそれである。「今現在、一般書店で買い求めるのは不可能」といわれたその本を、本学図書館で見つけたときの驚きとうれしさは、今でも忘れられない。この本が、「色彩調和」という（正直にいえば）私が避けて通ってきた色彩分野への「扉」を開ける手助けをしてくれたのである。

色彩調和とは、物や環境において「快適な感じを与える配色」のことをいう。私たちは日常の衣食住いたるところで色彩を目にし、その快・不快を感じながら日々を過ごしている。多くの人がある物を見て、「色がきれい！」と感じるとき、おそらくそのものだけではない、周りにある色との快い調和を視覚・心身両面から感じているはずなのである。

昔から「十人十色」といわれるように、色の好みや配色は主観的なものと考えられてきた。色彩調和においても、欧米では「著者の数だけ法則がある」といわれるほど広汎な領域の先人たちに論じられている。前述の本には、その先人たちの代表的な論理が著され、主観的といわれる配色にも、共通の知識となり得る原理があること

が丁寧に紹介されている。現在出版されている、多くの配色に関する実用書のバイブルともいえる本である。

現在「カラーコーディネーション」とは、個々の対象がもつ個性（条件）のなかに一般的な共感性を成り立た

せる技術と考えられており、個々の主観とは区別している。全体のまとまりを見るのか、部分を際立たせるのか。使う場面とその目的。さらに、素材感を考えること、こうした各々の違いを理解することが必要とされている。

さて、前述の本であるが、「色彩学の歴史をひも解く読み物としても読み応えのある一冊」であることを付け加えたい。私にとって色彩調和という「扉」から、さらに奥に進めるために、これから何度となくページを捲るであろう予感がする名著である。

(短大生活科学科助手)



本学教員寄贈著書紹介

平成16年に寄贈を受けた本学教員の著書等を紹介します。ご寄贈いただきまして、ありがとうございます。今後も著作物出版の折にはご惠贈いただければ幸いです。

五十野惇（人文学部）	西海賢二（人文学部）
言葉のバイエル教室 明治図書 1992	地方史研究ほか論文多数 2004
さくら先生の言葉のバイエル教室60 明治図書 1997	芳賀登（理事長）
上村協子（人文学部）	士魂の人 渡辺華山探訪 つくばね舎 2004
相続に見る女性と財産 家計資産の共同性とジェンダー 2004	大江戸を歩く 東京美術 2004
江原絢子（家政学部）	早川 浩（生活科学科）
日本人の食事 岩崎書店 2004	小児科臨床57巻12号 日本小児医事出版社 2004
近世・近代における饗応食・日常食の構造と特質 2004	前田雅之（人文学部）
金沢良枝（生活科学科）	記憶の帝国 終わった時代の古典論 右文書院 2004
完全版 コレステロール・中性脂肪を下げる	福祉学科実習指導室（人文学部）
おいしいバランス献立 主婦の友社 2004	平成15年度 現場実習報告集III 2004
肝臓病に効く食事 主婦の友社 2004	(敬称略 順不同 印は科学研究費補助金研究成果報告書です。)
佐藤広美（人文学部）	
近代日本における教師の子ども感についての歴史的研究 2004	

図書館への協力「AVコーナーの仕切り」

山口 智子

平成15年10月、図書館をより快適に利用してもらおうという試みとしてAVコーナーの各ブースに仕切りを設けたいという協力要請が、図書館から工芸文化学科の助手にありました。

従来のAVコーナーは、隣や前方の席の利用者がどのようなビデオまたはDVDを観ているのかがわかってしまう、他の利用者や通路を歩く人の身動きが気になってAV資料に集中できないといった利用者からの意見があったそうです。そこで、できるだけ費用を抑えつつそういった不都合を解消するために出された案が、「隣と前方を仕切るパーティションのようなもの設置」でした。

協力の内容としては、仕切りの材質やデザイン、施工に関して具体的なアイデアとアドバイスが欲しいとのこと。さっそく伊藤真奈美助手と私は大学にあるオフィス家具のカタログを片端からめくって、該当するようなパ

ーティションを探しました。しかし、サイズや形状、価格で適正なものが見つからず、AVブースの実測図をもとに手作りで制作する方向に話はすすんで行きました。図書館の希望を盛り込み、材質は圧迫感を感じさせないよう半透明の亚克力板、安全性を考慮して側面パネルの角に丸みをつける等、具体的なデザインを決定しました。(図1:作成/伊藤真奈美)亚克力板の厚みやビス留めの際の耐荷重、ビスの数等については住居学科の先生にアドバイスをいただいています。亚克力材料と施工を扱う会社のインターネットサイトで材料費の見積りを取り、図面とそろえて図書館へお渡しして私達の協力は終わりました。

平成16年夏、AVコーナーのブース仕切りは、提出した図面をもとに施工されました。(写真1)

(人文学部助手)



図1



写真1

図書館員による資料推薦について

図書館員が「自分が読んで感動した図書」や「皆さんにお勧めしたい資料」等について2003年6月から月に一度「図書館ホームページ」に図書館員による今月の推薦と題して載せていることをご存知ですか。

「新着案内コーナー」にも毎月貼り出しています。

大学の情報発信の中枢としての図書館の役割は大きいので図書館員は最高の図書館造りを目指して自分の仕事にベストを尽くしています。なかでも利用者の皆さんとのコミュニケーションを一番大切にしています。

「図書館員による今月の推薦」は皆さんに私達のそういう思いを伝えたくて始めました。

館員が推薦した資料が皆さんの学業に役立つばかりでなく感動と生きる元気とか勇気を少しでも与えることが出来れば嬉しく思います。

下記の資料が今までに推薦したものです。

平安王朝襲色目 (河田満智子著)
食べられる野生植物大事典 (橋本郁三著)
パソコン即効講座シリーズ (日経パソコン編)
建築MAP東京 (ギャラリー・間企画)
食は病んでいるのか (鷲田清一編著)
浅間山大噴火 (渡辺尚志著)
和の美を育む (木村孝著)
不味い! (小泉武夫著)
世界の中心で愛を叫ぶ (片山恭一著)
「新しい人」の方へ (大江健三郎著大江ゆかり画)
関川のしな織 (東北芸術工科大学東北文化センター製作)
デブの帝国 (クライツァー・グレッグ著)
懐かしい日本の言葉ミニ辞典 (藤岡和賀夫著)
田辺聖子全集第5巻「感傷旅行ほか」(田辺聖子著)
ろくろ首考 (武村政春著)
スポーツ選手の栄養&メニューハンドブック (橋本玲子著)

ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団(J・Kローリング著)
古文書のことば (秋山高志著)
美しき独断 中城ふみ子全歌集(中城ふみ子著)



感性と感性的デザインプロセス

呉 起東

人間は一般的に視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚という五感を持っている。そして、外部からの刺激によって直感的に反応する感覚から反応が起こるまでの過程が感性といえる。

例えば、「人象を受け入れる能力」または「感覚に従うような感情」、「対象を感受する受動的な能力」などと標記されている[注1]。

また、「適応行動の文脈の中で外界からの情報を論理に頼らず、感情に方向と強弱を与えられ、直接的に認知、判断、評価する能力」ともある。

感性の反対語としては「知性」といえるが、この知性は「頭脳の知的動き」、「知覚をもととしてそれを認識まで作りあげる精神的機能」、「新しい状態に対して、本能的方法に寄らずに適応し、課題を解決する精神機能」と考えられている[注2]。

「知性」の概念をまとめると「知性は本質的に記号論理(認識論を含む)に基づく理屈中心の概念・カテゴリー(化)の世界」として定義することができる。

以上の感性と知性をまとめると次のようになる[注3]。

- 1 感性の特性: 暗証、非定型、非完結、揺らぎ、ランダム性、曖昧、主観、個別性、差別化
- 2 知性に特性: 明確、完全性、完結性、確定性、規制、整然、表記、客観、共通性、普遍性

人間の感性は、大脳で情報処理が行われて、その処理の結果が、喜怒哀楽を司る情動中枢とつながることによって感じるようになる。

感性には、浅い感性(低次感性)と深い感性(高次感性)の2つのレベルが存在すると言われている。浅い感性とは、「重い」、「軽い」、「明るい」などのような感覚レベルでの感性であり、深い感性とは、「美しい」、「楽しい」、「洗練」などといった認知、抽象化レベルでの感性である。このような感性は、低次感性から高次感性に至るまで、幾つかの階層構造として形成されている。加藤[注4]は、このような感性を「物理化学レベル」、「生理的レベル」、「心理的レベル」、「認知的レベル」の4つの階層として捉えている。

森典彦[注5]は、感性の構造を次の3つの言語表現を用いて述べている。

1) 言語表現は、対象からの物理的刺激が感覚を通じて引き起こされるものと、対象を言語表現した上で記憶にあるその意味が引き起こされるものとの2系統があって、感性の表現は前者に相当する。

2) 感性の言語表現は階層構造を持ち、下位階層から上位階層への因果関係によって結ばれる。

3) 結果となる上位の一つの言語は、原因となる下位概念集合の1つの部分集合にだけ対応するのではなく、部分集合族(family of sets)にも対応する。

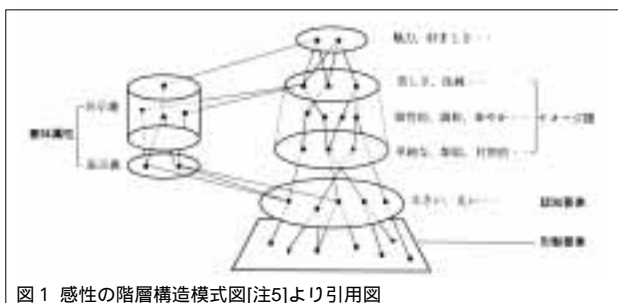


図1 感性の階層構造模式図[注5]より引用図

人間の感知情報処理は論理的な直列的に行われるのではなく、図1のように並列処理を行っている。原田[注6]は「感性的なデザインプロセスはこの並列処理を前提として構築されなければならない。製品設計の論理プロセスは、目的達成のための解の取得というプロセスであった。しかし、感性プロセスによる製品設計は必ずしもそのような順序構造を持たないのである」と述べた。図2は感性構造をベースにした並列的デザインプロセスの仮想モデルである。人間の感性は、非定型、非完結、揺らぎ、ランダム性、曖昧、主観、個別性、を持っている。従って人間の能力はそれぞれ異なり、従来の論理的なデザインプロセスですべてのデザイン問題を解決するのは無理があると考えた。実際のデザイン作業を行うとき、論理的な直列的デザインプロセスで行う場合は少なく、状況に応じてデザインプロセスを変えて作業を行うことが多いのである。

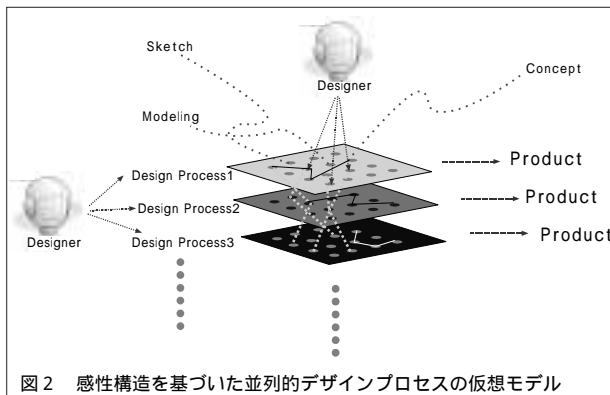


図2 感性構造を基にした並列的デザインプロセスの仮想モデル

	コンセプト			展開			評価		
	1 TEXT	2 IMAGE	3 PRODUCT	1 TEXT	2 IMAGE	3 PRODUCT	1 TEXT	2 IMAGE	3 PRODUCT
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	2	1	1	1	1	1	1	1	1
11	2	1	1	1	1	1	1	1	1
12	2	1	1	1	1	1	1	1	1
13	2	1	1	1	1	1	1	1	1
14	2	1	1	1	1	1	1	1	1
15	2	1	1	1	1	1	1	1	1
16	2	1	1	1	1	1	1	1	1
17	2	1	1	1	1	1	1	1	1
18	2	1	1	1	1	1	1	1	1
19	3	1	1	1	1	1	1	1	1
20	3	1	1	1	1	1	1	1	1
21	3	1	1	1	1	1	1	1	1
22	3	1	1	1	1	1	1	1	1
23	3	1	1	1	1	1	1	1	1
24	3	1	1	1	1	1	1	1	1
25	3	1	1	1	1	1	1	1	1
26	3	1	1	1	1	1	1	1	1
27	3	1	1	1	1	1	1	1	1

表1 27通に想定したデザインプロセス

図2のようにデザインの基本的な行程を3段階 (concept sketch modeling) と想定すると、表1のように27通のデザインプロセスが考えられる。デザイナーは作業を行う際、表1にあるプロセスの中で自分の感性構造と合う

プロセスを選択して作業を始めることができる。個人の能力に合わせスケッチから始めるデザイナーもいるだろうし、モデルから造り始めるデザイナーもいるだろう。それは人間が並列的な思考プロセスで行動するのを表している。デザイン作業は極めて感性的なものであり、その際前述した並列的処理を行っているものと考えられる。

(人文学部講師)

注1 新版心理学辞典:平凡社。

注2 八木昭宏:感性の計測、日本ファジィ学会誌、Vol.9, No.3, 318 - 326, 1997

注3 森典彦:第3回ファジィシステムシンポジウム、日本ファジィ学会、903 - 906, 1997

注4 加藤俊一:印象工学ワークショップ講演記録集、富士通、1996

注5 森典彦:美しさを解読する、応用数理、1995

注6 原田昭:感性工学における並列的設計方法、日本学会会議、第3回感性工学学術シンポジウム、1998

nature - ネイチャー -

岩見 哲夫



Photo by Prof.T.Iwami

自然科学の分野では、毎日のように数多くの発見・発明が世界中の学術雑誌に発表されている。星の数ほどもある、その学術雑誌の中で最も権威あるもののひとつとして知られるのがnature(ネイチャー)である。その重要性は、引用数で評価されるインパクトファクターの高さ、所蔵大学・研究機関の数の多さを見れば一目瞭然である。

ネイチャーが扱う分野は、自然科学全体に及び、時には心理学や行動学、人類学の研究成果も掲載される。1869年に創刊されたこの雑誌には、現在までに膨大な数の業績が発表されている。その中で、魚類学という私の専門分野から印象的な論文としては、古いものであるが、1939年に発表されたシーラカンス発見の報告や、1954年に発表された“白い血の魚”の論文などがある。実は、この“白い血の魚”は南極周辺海域にしか生息しないコオリウオ科魚類のことで、私の学位論文の材料となった。

ネイチャーに関する最近の話題といえば、ヒトゲノム計画の成果が発表されたことであろうか。ヒトゲノム計画とは、ヒトの全遺伝情報の解明という目標の下で莫大な予算と人手をかけて進められた一大国際プロジェクトのことである。上の写真はその結果の要約を掲載した特集号の表紙で、たくさんのポートレイトを集めてDNA分子モデルを表現したデザインが印象的である。また、中国で発見された恐竜化石の論文には、その恐竜に羽毛が生えていたとする衝撃的な内容が、羽毛の跡がはっきり分かる鮮明な化石写真とともに掲載され話題となった。

このような科学の最先端の情報を読破するには、

難解な専門用語をそれも英語で読まねばならないわけで、専門外の人間にとっては考えるだけで気が重くなる。しかし、今では毎号に日本語の目次と要約が付き、さらには月刊ではあるが日本語のダイジェスト版まで出版されるようになってきている。パラパラと要約を見るだけでも科学の最先端を垣間見ることができる。

たまたま手元にあった2005年1月20日の朝日新聞を見ていたところ、“恐竜と一緒にいたカモ”というタイトルで南極で発見された化石の記事と、“ラミダス猿人さらに9人”という最も古い人類の祖先の化石が新たに発見されたという科学記事が出ていた。なんと、いずれの記事もネイチャー最新号に掲載された論文を紹介したものであった。考えようによっては、これは単にネイチャーの出版社が宣伝上手であること示しているだけなのかもしれないが、専門家ではない人々でも興味を持てる内容ということで新聞社が掲載を決めたことは間違いないだろう。このような視点で最近のネイチャーの目次を眺めると、“恋人募集中のオスはマメであれ(no.6984)”, “チンパンジーでも娘は母をまねる(no.6984)”, “アリさんとアリさんがこっつんこ(no.6978)”, “痛い目にあうかどうかを予測する(no.6992)”など、確かに楽しそうなタイトルの論文がいくつも掲載されている。

本学図書館にはそのオリジナルの雑誌が所蔵されており、毎週新しいネイチャーが届いている。是非、身近にある最新科学へのゲートウェイを利用して欲しい。

(家政学部教授)